

「華人郷党の盛衰と街並み」

「タイを知る会」2021年4月2日講演会、

青山学院大学特命教授・桑野淳一

1、導入

ビザなしでタイにやって来たが、タイのビザを取得するのは大変骨が折れる。これは歴史を遡ると、タイにやって来た潮州人がここはなかなかいい国なので、これからやって来る外国人や潮州以外の華人にも国を開かず、我々だけでうまいメシを食おう。という訳で自分達の国造りをして、中国を含め、外国から来る連中を締め出そうとしたことに起源があると言われている。つまりは入国制限を厳しくして、大事な美味しいところは自分達で独占しようとしたというのだが、私は苦勞して、ホテルでの隔離も耐えて、やって来ました。

2、アユタヤ時代の華僑

しかしながらそれ以前、アユタヤ期にタイに来ていた華僑華人も居た。その代表的な例が福建や広東からの方々であった。

- ・海洋航海の王者、福建の人々(7%)→彼らは王家に様々な珍宝文物を持ち込んで王家に取り入り、貿易船のキャプテンは貴族に登用されたりもした。

- ・機械技術者としての誇りを持つ広東の人々(7%)→彼らは米作を中心とする国づくりの中で精米機などの機械技術者としてなくてはならない存在であった。

2、トンブリ王朝 (1767年から1782年までの僅か15年、一代限りの王朝)

トンブリ王朝のタークシン王は潮州人、(56%)

彼は厳しい労働に耐えないタイ人に代わって潮州から進んで労働者を招来した。このことが潮州人中心の国づくり、町づくりに繋がっていく。

4、次のバンコク王朝 (ラタナコシン王朝) もこれを引き継いだので、バンコクの華人のメジャーな存在は潮州人というのが定着した。→東南アジアの国家で経済を握っている華人は多いが、潮州人がメジャーなのはタイのみであり、他の諸国と比べても特異な存在。

日本で言えば、江戸時代後期から明治時代にあたる→丁度ラマ5世チュラロンコン王の治世は1868-1910であり、ほぼ明治天皇の治世1867-1912と重なる。

バンコクはタイの王都であるから、その都に住める者は王族とそれに連なる貴族達であって、一般のタイ人は当初は住めなかったばかりか、来ることも阻害されていた。

従って、華人が代わってまちづくりを担って来た。→その中心は潮州人であった。

5、海南郷党の場合

海南人はその点、後からやって来たのでいわば徒手空拳の状態であり、なかなか華人社会の中心にはなり得なかったが、タイの地方で華人が最初に作った町、ナコンサワンは海南人の町と言われている(12%)→彼らは進んで未開の地を切り開き、森に入り、製材業などを中心に独自の渡世家業を発展させ、それなりの地歩を築いて来た。

6、客家の場合(16%)

また、正統な漢民族と名乗る客家もタイにやって来るのは比較的遅かったが、彼らも大陸南部では石山に囲まれて生活していた者も多く、多くは石切工などを渡世家業としていたが、それがタイでの鉄道敷設(鉄路土台の砂利)の時期と重なって、地方駅周辺を押しやることによって大いなる活路を見出して来た。しかし、彼らの居住地は河南一帯に散開していて苦労して来たので、あまり自らを明かして誇示しない習性があるてわかりにくい。

7、以上のようなことが絡み合いながら、バンコクの街は華人郷党による町づくりが行われ、必然的に誰がどこに住むかの棲み分けが形成された。背後には言葉が通じないと仕事もできない。言葉は谷によって違っている。

それで、潮州、福建、広東(広肇)、海南、客家郷党による街並みが形成され、それぞれに風情のある独特の街並みが見え隠れしているので、それらを手掛かりに町歩きすることはその出自とともに、どのように生き、どのように街づくりをして来たかが解って大変興味深いことである。それを解く鍵はそれぞれの郷党が独特の意匠を持って精神的な拠り所とした華人廟にある。

8、結論

以上のようなことを思いながら華人廟を巡っていくと、そこに生き死にした人々の生涯が浮き彫りにされる。いうまでもなく人は様々な愛欲の中に悩みながら生きていくのだが、そのような中で大きな試練を経験した人こそ、強く生きているのを目の当たりにして来た。人は辛いこと、試練の中にあつてこそ、強く生き成長できるものであることを確信した。ならば辛い時こそ我々は嘘でもいいから、手を叩き、喜び、これこそ我を強くするチャンスと喜んでみてはどうだろうか。所詮は人生も一つの解釈で変わるのでありますから。華人廟を回りながらそのようなことを合点し、つぶやいてみた。